

仏の名匠 公募のアマ

1+100本 トランペット参集

仏を代表するトランペット奏者エリック・オービエ(50)が9月1日、地雷被害者らへのチャリティー演奏会で大勢の市民奏者と合奏する。題して「1+100本のトランペット大集合」。プロとアマが音を合わせる——この演奏形態を自ら考案した本人に聞いた。(パリ＝国末憲人)

題名の「1」は、指揮も兼ねるオービエのトランペット。一緒に演奏するアマチュア奏者100人を日本で公募したところ、小学生から60代までの200人以上が集まり、規模が膨らんだ。

14歳でパリ国立高等音楽院に入學し、19歳でパリ・オペラ座管弦楽団の首席奏者に就いた。その後もソリストとして活動する傍ら、各国のコンクールの審査員も務める。その名匠と今回、共演する参加者の中には、初心者もいる。

「様々なレベルの人が音を合わせる、普段よりいい演奏をしようと努力する。それが目的だ」。自らも、アマチュアの演奏からエネルギーを吸収したいという。

仏国内で2006年に約150人の奏者を公募して同様のコンサートを開いた。その映像を見た今回の演奏会の関係者がオービエに声をかけ、日本での開催が実現した。

地雷被害者ら支援「レベル様々 いい演奏生む」

音楽と無縁の庶民の家庭に育った。幼少の頃、田地の隣家にあった古いトランペットをたまたま手にしたのが、音楽を志すきっかけになった。「私は一度もトランペットを選んでいない。トランペットの方が私を選んだ」と話す。エリートコースを歩んだのは、物事を極めたい一念からという。「トランペット自体は私にとって重要でなかった。打ち込めるものなら何でもよかった」と振り返る。

努力する過程にも価値を置く。その点で「日本人の感覚に近い」と考えている。頻繁に来日し、日本人を指導する機会も多い。だが、国際的に通用する日本人奏者が少ないことを残念がる。

「アジアに共通する問題だが、目上の人に敬意を払う余り、教師を乗り越えられないようだ。それに練習しすぎだ」。豊かな心が豊かな演奏につながる、映画や食事を楽しむことも上達のコツではないか、という。

演奏会は東京都港区のサントリールホールで。モンテベルディのオペラ「オルフェオ」などから選曲予定。「難民を助ける会」(電話03・5423・4511)主催。収益はアジアやアフリカの地雷被害者ら障害者の支援に充てられる。